高知にいるからこそ
学べることがある。
学びのエリアを広げると
新しい自分への扉が開く。

日曜市に活力！

〈特集〉社会協働・地域協働

日曜市を支える縁の下の力持ちに

高知市中心街で毎週日曜日に催される「日曜市」は、日本で最大級の青空マーケット。約13㎞の路上に、400店以上の出店が並びます。その歴史は300年以上で、近郊農家の生産者などが売り手となって、新鮮な野菜や果物から総菜、工芸品まで商品は多彩。古くから高知市民の台所市として親しまれ、近年は多くの観光客が訪れる観光スポットとしても賑わっています。

この日曜市を学びの場に選び、活躍している高知大生たちがいます。そのひとつがサンデーマーケットサポーターズ（Sunday Market Supporters以下SMS）。出店者のお手伝いや市の案内などの活動をしています。

市の一角に設ける2ヵ所の専用テントがメンバーの活動拠点。観光客のために観光パンフレットを準備したり、周辺の出店のテントの設営を手伝ったりします。日曜市の出店者の多くは高齢者なので、学生たちの機動力が効果を発揮します。店番をしたり、販売を手伝ったりして、周辺の出店者とすっかり顔なじみになり、頼られる存在になっています。なにより、「若い人が入ってくれると市に活気が生まれるから、うれしいねえ」と出店者から喜ばれています。

観光客にパンフレットを使って説明

また、観光客に向けた日曜市案内を実施。トイレの場所から、「あの商品を売っているのはどこ？」といったピンポイントの問い合わせまで対応します。高知のおもてなしの最前線に立っているだけに、「わかりません」とは言いづらい、言いたくない。そこで、事前にメンバーたちは出店者を1軒1軒まわって、何を売っているかなどを細かく取材。それをノートにまとめて、観光客の問い合わせに対応しています。

大学から外に出ないと、コミュニケーションの対象は同年代の友人と教えを受けている先生らに限られてしまいます。それが日曜市という現場に飛び込むことで、さまざまな年齢の人たちとの交流を経験できます。さらに、現場に入るからこそ、今の日曜市が直面している課題も見えてきます。「SMSの活動を通して、日曜市を訪れる若者が少ないことに気付きました。そこで、若者向けのアプローチに取り組んでいます。授業やゼミでこれまで学んできたことも、この活動で活かせていると実感しています」とメンバーの一人は話します。

生産から販売まで関わって集落に深く寄り添う

一方、SMS以外にも日曜市でより生産者に近い立場から活動しているのが、四国山地の中山間地、大豊町怒田地区の農産加工品を商品化して販売する学生グループです。袋詰やラベル貼りなども学生たちが担当。日曜市の出店では、同地で採れた野菜などの生鮮品とともに、乾物や豆などの加工品が並んでいます。店では、元気のいい学生の売り込みの声が響きます。

メンバーの中には現地に住み込み、農作業などに携わりながら参加している人もいます。そんな学生のひとりは、「売っているのは、怒田地域のおばあちゃんたちが一生懸命つくった野菜や加工品。それに自分たちがつくった商品もあります。売れ残ったら申し訳ない。すごく責任を感じます」と話します。今後はドリンク系の新商品を開発したいと、意欲満々です。

日曜市という学びの場では、教室のように一方的に教わることはありません。学生たちは主体的に関わることで、自ら課題を見つけ、その解決に向かって真剣に取り組むことで成長につなげています。そんな姿は、少なからず地域の活力にもなっているようです。

大豊町の農産加工品を販売する農学部などの学生たち

Sunday Market Supporters サンデーマーケットサポーターズ

観光客に高知の食材をアピール！

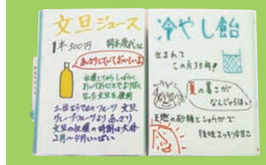
サンデーマーケットサポーターズ
人文学部社会経済学科 3年生
山﨑（やまさき） 真名（まな）

高知市出身で、日曜市は子どものころから父親に連れられてきていたおなじみの場所だとか。「SMSでは出店者側の目線に立てるのでとても新鮮に感じています。将来はまちづくりに携わるような仕事をしたいです」

SMSは現場での活動のほかにイベント企画にも取り組んでいて、日曜市の食材を使った弁当をつくって販売を行いました。観光客は日曜市に来ても、店に並ぶ食材をその場で食べることはなかなかできません。日曜市で売られている高知独特の生鮮食材を食べてもらおうと企画しました。

このほか、地元の若者を日曜市に呼び込むための企画を立てたり、シンポジウムを開催したりしています。SMSの活動で、出店者さんに自分から積極的に話しかけられるようになりました。まわりの役に立つだけでなく、自身の社会性も磨けているのではないかなと思っています。

SMSの日曜市での活動を留学生に紹介



日曜市を取材した日曜市ノート

リエゾンオフィス室長
総合教育センター
特任講師
今城（いまじょう） 逸雄（いつお）

高知県出身。明治学院大学経済学部卒業。1992年、高知商工会議所に勤務し、主に商店街の活性化を担当。在職中、高知大学大学院人文社会科学研究科を修了。2005年には高知県特別職知事秘書に就任。2010年より現職。「いまの学生はとってもまじめ。ちょっと回り道してもいいんだよ、とアドバイスしたいですね」

学生と地域の出会いの場

総合教育センター リエゾンオフィス「コラボレーション・サポート・パーク」

（通称：コラパ～）

学生の“やりたい気持ち”を応援して 学びの場を広げ、地域にもっと活力を

●リエゾンオフィスの役割は？

一言で言うと、学生と地域を結ぶ懸け橋として、学生活動を支援することです。「えんむすび隊」（P3）の企画・運営や、学生たちの中で生まれる「地域で何かやりたい」という気持ちの受け皿として、学生たちが企画したプロジェクトを支援する「コラボ考房プロジェクト」や「S・O・S認定活動※」、首都圏や高知県内の企業を対象にしたインターンシップも行っています。また、高知大学では、すべての学部を対象として地域の実情を見たり、地域の方の話を聞く授業を行っています。そのための教育フィールドの開発もしています。

●学生が地域で学ぶことの意味は？

学生は大学入学まで学校以外の人と接点が少なく、非常に狭い世界で生きてきています。入学後に勉強することを社会でどのように活かすことができるのかというリアルなつながりを、自分の中で感じたり組み立てたりできない状態です。そういった状態で4年間、キャンパスで過ごすだけでは、実社会に出た時に少なからず壁にぶつかることになる。地域に出てさまざまな人と関わり、それまで知らなかった世界を知ることは大いに意味があると思います。

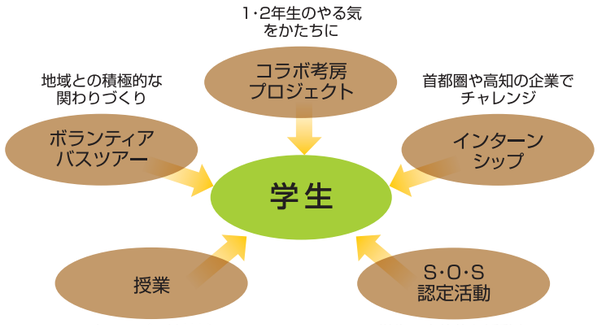
●学生は地域に出てどのような事をすることができますか？

たとえば県内の中山間地に行くと、若者たちが来た！というだけで地域の方は喜んでくださいます。農作業の手伝いや、イベントの運営をすることで「ありがとう」の言葉をいただけ、学生たちの「やればできる」というやる気につながります。一方で「君たちは学びにきているのだよ。何を学んだの？」とちょっと厳しいご指摘をいただくこともあります。これは学生にとってとてもいいことで、「できる」と思っていた自分が、じつはまだまだ足らないことに気がつく機会になります。学生は一度、へこたれたほうがいいのです。そこから問題意識が生まれるのですから。

●今後の方針は？

これからもさまざまな機会で、学生と地域を結ぶための支援をしていきたいですね。同時に、地域の皆さんが気軽に大学に来ていただくための窓口にもなりたいと考えています。

学生と社会をつなぐリエゾンオフィスの支援メニュー



※S・O・S認定活動とはStudents' Organization for Self-help and Official Supportのことで、「学生ピア・サポート」と「地域活動・地域貢献」を行う学生団体を支援

私たちが応援します！

コラボレーション・サポート・パーク（通称コラパ～）の頼れるサポーター

清水伺名子（しみず みなこ）／地域と学生のマッチングほか担当「考え方や生き方の骨組みになるような出会いや体験ができるよう、お手伝いしていきたいですね」

福井美和（ふくい みわ）／インターンシップ担当「広い経験とさまざまな出会いを通して、深いつながりのある大学生活を送ってほしい。そこから見える未来があるはず」

大槻聖子（おおつき せいこ）／コラボ考房プロジェクト担当「活動を続けるには、苦労や困難はつきもの。しかし、続けることで得るものがあるので頑張って！」

地域に跳び込む最初の一歩

えんむすび隊 出動!!

「何かやってみたいんだけど…」「ボランティアに参加したい！」学生の中には、そんな思いを抱いている人が多くいます。しかし、どうすればいいのか、手をこまねいているのが実情。そこで、最初の一歩を踏み出すためのお試し企画としてリエゾンオフィスが運営しているのが「高知大学えんむすび隊」です。

毎月1回程度、県内各地を訪ねるワンデイツアーを実施。あるときは田舎のおばちゃんたちと郷土料理をつくったり、またある時は山里の運動会に参加したり…。農作業の大変さを実感し、地域のイベントを通して地域がかかえる問題にふれたりしています。

たとえば5月のある日、えんむすび隊が向かったのは高知県西部の山里、中土佐町大野見地区。参加したのは3人の男子学生です。月に1回、モーニングサービスを提供するカフェを運営している女性グループ「ほのぼの倶楽部読遊会」が迎えてくれました。

最初の活動は、モーニングサービスのお手伝い。高知大生が来るからと、いつもより多くのお客さんで大忙しでした。昼からは茶摘みを体験。生まれて初めての茶摘みをする学生たちのたどたどしい様子に、おばちゃんたちは笑顔が隠せない様子でした。

参加した学生たちは、「地域そのものを体で感じられた」と話しています。また、受け入れていただいたほのぼの倶楽部読遊会の会長、南部桂さんは、「高知大学の学生にはいつも元気をもらっています。これからも学生たちと関わっていけたらな、と思います」と話してくれました。

こうした活動も、「うん、よく頑張ったよね」という学生の達成感だけで終わってしまうのでは、深い学びにはつながりません。そこで、えんむすび隊に参加するのは、活動後のレポート提出が条件。地域で活動することにより、何に気がついたのかを振り返り、自分と社会とのかかわりを考えるきっかけにつなげようとしています。

えんむすび隊

大野見へ行く

ほのぼの倶楽部
読遊会 会長
南部（なんぶ） 桂（けい）さん

インターンシップや海外留学も人間を磨く学びのフィールドだ！

人との関わりを意識したインターンシップや、課題解決能力の養成を目指した短期留学。ユニークな目的を持った新しい世界での経験が学生の人間力に磨きをかける

海外留学 学生×海外

異国の地で「わからないから教えて」と聞くこと、自分から働きかけることの大切さに気付く

3年生の夏休みに、イタリアの連携大学に1ヵ月半、短期留学していました。実は２年生からSMS（P1）で活動しており、市場に興味がありました。そこで、街路市の本場であるヨーロッパで市場の研究を留学のテーマにしました。留学では、まず自分から動かなくてはならないことを学びました。わからないことがあれば「教えて」と聞き、自分から発言もする。そうして初めて、学生同士の議論に加われるし、相手も答えてくれるんです。自主性を持つことがいかに大切か、日本とは違い、どん欲に学びを求める海外の学生たちの中に身を置いて分かる、特殊な環境の中で感性が敏感になっていたからこそ気付けたのではないかなと思います。

イタリア語を話せないのでコミュニケーションには苦労しましたが、いろいろな経験ができました。もし、明日もう1回行って来いと言われたら、すぐに行くことができるだけの自信がつきました。

人文学部国際社会
コミュニケーション学科４年生

阿曽 佑也（あそ ゆうや）

兵庫県出身。「航空チケットの入手からホテルの手配まで、全部自分でやらなければいけませんでした。途中、ホテルが取れなくてあわてたことも。ハプニングだらけの留学でしたが、今ではいい思い出かも？（笑）」現在は高校教師を目指して勉強中。

学生×企業

社会に出て何ができるか実際に試してみたかった

病院給食などを行う高南メディカルという企業で３週間、SBI※のインターンシップをさせていただきました。就活のためのインターンシップとは違い、SBIは人間関係を形成する力を身につけることを目的にしているのが特徴です。もうすぐ就職活動が始まるという時期なので、自分は社会に出てどんなことができるのだろう、実際に試してみたい、と思ったことがチャレンジした動機です。

インターンシップでは、厨房での作業などを行いました。仕事を通じて食品業界の衛生管理の厳しさなど、全く知らなかった一面に触れることができました。また、働く上ではいかにコミュニケーションを円滑に図るかが大切なことを学びました。いろいろと指摘を受けたり、うまくいかなかったりすることもあったのですが、迷ったり悩んだりして一生懸命考えたら、きちんと評価もされる。働くことは楽しい！と感じました。

人文学部
社会経済学科３年生

岸本 里桜（きしもと りさ）

岡山県出身。もともとは教職志望だったが、インターンシップの経験などを経て、今は民間企業への就職を希望しているのだとか。「インターンシップが終わった時、高南メディカルの部長さんから、『まだいてもいいよ』と言われたんです。うれしかった！」

インターンシップ

学生を受け入れると企業の課題が見えてくる

SBIは、学生を「お客さん」として受け入れるのではなく、社員の一員として仕事に従事する経験をつくってほしいと大学から要請を受けています。学生の皆さんには、調理現場での盛り付けなどを体験していただきました。従来のインターンシップとは違い、学生さんも大変だったのではないでしょうか。

SBIでは社員が学生の指導を行いました。学生と関わることで、社員もスーパーバイザーとしての成長につながったと思います。現場に学生が入るということは、まったく何も分からない新人が加わるということ。社員は段取りや動きを工夫して、受け入れ環境を整えていました。インターンシップを受け入れることで、企業の課題も見えてきます。SBIは企業にとっても、良い刺激を受けるというメリットがありますね。

（中央：岸本）

現場実習風景

SBIに参加した農学部と人文学部の学生（右：岸本）

株式会社 高南メディカル
取締役副社長

宮本 高憲さん（みやもと たかのり）

高知県出身。「以前のインターンシップでは、私との同行が主になっていました。今回のSBIでは会社ぐるみで学生と向き合うことが出来たのが学生にしても私達にしても良かったですね」

※SBI（Society Based Internship）とは人間関係形成インターンシップのことで、高知と首都圏（横浜）の企業で3人1組のチームで行う3週間のインターンシップ

大学での学問にフィードバックできる、地域の学びは自分自身を見つめ直す格好の場

学生にとって、地域の中で活動することも大切な勉強です。その中で自分は何ができるのかと自分を見つめ直し、未熟さに気付き、もっと勉強しなければいけないと痛切に感じる。そうした思いが、勉学への非常に強い動機づけになると期待できます。また、地域の役に立つことで、自分はできるんだという前向きな姿勢を身につけることもできる。

現実社会に関わることで、大学で学ぶ学問が世の中とつながっていることに気付き、より深い学びを実現できるのではないでしょうか。地域活動と、大学で知識体系を専門的に学ぶことの両者が相まって初めて、大学の教育機能を十全に果たすことができるのだと思います。

総合教育センター　センター長
人文社会科学系教育学部門教授

藤田 尚文（ふじた なおふみ）

東京大学卒業。博士（心理学）。1983年、高知大学に着任。専門は教育心理学と実験心理学で、最近では学力の二極化について研究を進めている。「高知大学には5,000人の学生がいます。このマンパワーはすごい！いろいろな形で地域の活性化につながる可能性を秘めています」